

## 蔵王に滑べる

夜がまだ明けない午前3時半、統計課より厳選された(?)4名（武子・戸谷・渡辺・中里）を乗せ、一台の車が蔵王スキー場（妙高高原・志賀高原スキー場と並び、日本を代表するピック・スキーエリアである）征服の2泊3日のスキー旅行へと、水戸を出発した。途中二度休憩をとりながらも、7時間余りで無事目的地に到着。途中の栗子国際スキー場・米沢スキー場には、スキーヤーは見られなかった。今日は非常に空いている。が、全員睡眠不足と旅の疲れの為、直ぐにゲレンデに出かける気力もなく昼まで旅館で休憩することにする。

午後12時、スキー開始。中央ロープウェイに乗り中央ゲレンデスキー場へと向う。吹雪である。吹雪の中で足ならしをするが、なかなか雪に馴染まず、皆ぎこちなく滑っている。吹雪がますます激しくなり、雪が顔につきさらさるように痛い。また、ガスも出てきて視界が悪くなり、どこまでゲレンデであるかわからないくらいである。とても滑るコンディションではなく、前を滑べるスキーヤーの背中を目標に恐怖しながら下の横倉ゲレンデに向い下へ下へと滑っていく。さすがに横倉ゲレンデまで滑降してくると（標高差約500m）吹雪もなく、ガスもでていない。ここロッジで一同休憩する。

休憩後、ゲレンデに出てみると空いていたはずのゲレンデが混んでいる。おそらく上のゲレンデで滑べっていたスキーヤー達が、皆吹雪とガスから逃げてきたのであろう。しかたなく、天気が回復していることを祈りながら、蔵王ロープウェイ山麓線に乗り、ユートピアゲレンデへと向った。しかし、その淡い期待も無残に打ち砕かれた。「今年はついてないなあ！」と、異口同音に呟きながら、また降りることにし、上の台ゲレンデに降りていった。上の台ゲレンデに着くと、1人を除いてこの悪コンディションの中でスキーを続ける気力のある者がいなく、民主的・多数決の原理に基づき宿に帰ることになった。1日目の実質スキ一時間、約1時間。

2日目、午前7時半起床、標高約1,700mにあるロープウェイの山頂駅がハッキリと部屋から見える快晴である。午前9時30分、「きのうの分を取り返すゾー！」と、意気込みながら出発。ロープウェイ乗り場まで来ると、待ち時間「1時間」の表示である。「平日なのに随分混んでるなあ！」と、あらためて蔵王スキー場の人気に関心しながら

リフト4本を乗り継いで、ユートピアゲレンデへ行く。リフトに乗っていると、ゲレンデのスピーカーが、「只今午前10時、気温マイナス1度、天気快晴」のアナウンス、最高のコンディションである。また、きのうガスで見えなかった蔵王名物の樹氷が、美しく眼前に広がっている。自然が造ったその美しさに、皆しばし見とれるほどである。蔵王スキー場の人気は、ゲレンデの多さもさることながら、この樹氷の美しさにもあると思う。よく、お年寄や婦人が樹氷を見物に来ていることも、うなづけることである。この美しい景色をみながらユートピアゲレンデ・百万人のゲレンデで練習を重ね、樹氷原コース（ロープウェイの山頂駅から山麓駅までの全長7km・標高差815mのダウンヒルコース）へと滑っていった。皆、調子よく滑っている。途中、上級者以外滑降禁止の立札がある蔵王最高の難所「横倉のカベ（最大斜度38度）」があるが、皆、自分の力量を考え迷わず迂回コースに滑っていった。

昼食をとりながら山頂ロープウェイの順番を待つこと1時間40分、やっと目的の山頂駅に到着。ここからサンゲ坂をとおり大平コース（パラダイスゲレンデからサンライズゲレンデまでの全長4.5km）へと滑降して行く。足がもつれ、斜面に負け、ギャップを乗り越えられずにころびながらも、天気もよく気分壯快である。

ロッジで少し休憩をしたのち、リフトを乗り継いで高島コース（鳥兜山頂から上の台ゲレンデまでのテクニカルコース・標高差500m・全長5km）へ、このコースを滑り終った時には5時半である。もうリフトも終りの時間である。十分に滑った満足感と疲れが、今夜の心地よい眠りを誘う



ことだろう。  
3日目、きのうの天気が全く嘘であるかのように雨が降っている。未練を残しながらも予定変更し、午前10時一路、水戸を目指した。

(中里)

さっそくすべる！



## 夢を登る(4)

—ガルワール・ヒマラヤ遠征隊—

帰りのキャラバンは、安堵感からゆったりした気持ちで進む。I氏がガーネットを発見(?)するや日本へのみやげにとばかり皆一様にガーネット探しに精を出す。今まで高きを求め、熱いまなざしで見上げていた連中が、一変して俗物と化し、ガーネット探しに下ばかり見ては石を碎いている姿は、何か寄異に感じ、こっけいでもあった。

下山して2日目、雷雨に見舞われる。やはりモンスーンが近い証左であろう。行きはあまりの暑さに日陰を求めていたのに、10日間で秋は急速に深まり、肌寒いほどであった。しかしダクリ峰(2,505m)を境に天気は安定し、秋はその前で足踏みしていた。

3日目、峰前のレストハウスに泊まる。ニュー・デリーのハイスクールの生徒達が先生に引率され泊まっていた。上流階級の子弟であろうか、服装もキチンとしている。その傍ら我々のポーター達は、素足で服装もボロで小さくなっている。意味もなくその生徒達が生意気に思え、腹立たしくなってきた。

ダクリ峰からの展望は、今も思い出の中に消えることなく、秘蔵の風景である。素晴らしいヒマラヤの山々に別れを告げ最終キャンプ地までキャラバンは進んでいく。

最終キャンプ地での夜は、楽しく素晴らしい夜であった。羽田から持っていた日本酒に再会し、現地の酒(ロキシー)とともに素晴らしい時を与えてくれた。ポーター達との合唱は夜遅くまで続いた。

10月12日、大勢のポーター達が手を振る中、バスはインドの代表的な避暑地ナイニタールへと向う。バスの中は、昨日の余韻が残っていて修学旅行の様。歌が次から次へと飛び出す。ソエゾンも歌う。「ラブユー東京」が一番気に入ったらしい。(この歌は翌日も大ヒットであった)歌に疲れてきたころナイニタールに着く。その人波に最初に驚く。湖の周りにホテルが林立していた。

夜、街中にドクター達と連れだって出る。最初に飛びこんだのは、前からの予定通りの一軒しかない中華料理店である。焼きそばの注文。(8ルピー≈240円)ペロリと平らげる。街中は行き交う人々でごったがえしていた。酒を手に入れて戻り歌を歌いながらの酒盛りは続く。

13日、一路ニュー・デリーへ。途中の町で何回か休けいをとりながら……。車の数が増え、前方にビルが見えてきた。「ニュー・デリーは、やはり都会なんだなあ!」と変

な所で感心しながら、長い旅を終えインド最後のインペリアホテルに着く。早速、室に入り日本出国以来(22日ぶり)の風呂に入る。なかなか泡が出ず閉口するも、ひさしぶりにサッパリとする。PM7:40よりインド人記者との会見あり。カメラの大半は日本製であった。空腹感と戦いながらも無事終り、ディナー・パーティーへと進む。ビールにて乾杯。大変水っぽいビールであった。

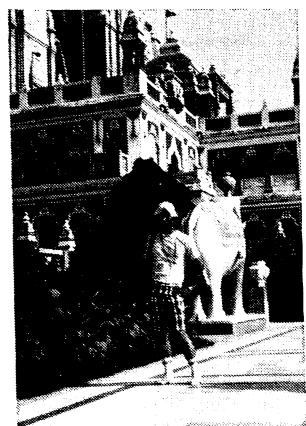
シャンデリアのある豪華な室で食事は進む。場違いの連中が、行儀作法などおかまいなくボーイを呼ぶ。「ワンモア」「ワンモア」。素晴らしい食欲であった。「ワンモア」で腹がふくれない連中達と、レストランを求めて夜の街へ出かける。人通りは少なく、大勢の人々が外の簡易ベッドに寝ていた。暖かい静かな夜であった。

14日、インド最後の日、午前中は市内観光、午後買い物と強行スケジュール。バスガイドは、日本にも留学し、日本語の話せる男性がついていた。ラキシミ・ナライ寺院、大統領官邸、国立博物館、コトブミナールの塔、オールド・デリー市内、レッドフォードとかけ足観光。インドの歴史をかいま見た。それは、仏教文化を破壊したあとに回教文化が続き、ヒンドゥー文化が最後に残った歴史であろう。端的にそれは宗教人口に表われている。仏教10%、回教20%、ヒンドゥー教70%である。時間を充分かけてゆっくり観光したいと思った。

ホテルに着くや、慌ただしく買い物をする。出発の時間はせまってきて了。バスにて空港に向う。

空港のチェックは厳重であった。ポンペイでのハイジャック事件を初めて知った。飛行機はエンジンを全開し、上昇する。真下に街の灯が見える。素晴らしいインドに別れを告げるべく、いつまでも窓に顔を押しつけている私であり、「また来よう」と、自然に独白する私であった。(完)

(檜山)



ラキシミ・ナライ寺院前の筆者